

観光資源としての大滝山と眉山登山鉄道計画

石尾 和 仁

はじめに

眉山は、『万葉集』にも「眉のごと雲居に見ゆる阿波の山かけて漕ぐ舟泊しらずも」と詠われた徳島市のシンボルであり、市内のどこからでも眺望できる。憩いを求めて散策する市民も多い。山頂からは、眼下に広がる市街地と悠然と流れる吉野川、市街地を縫うように流れる新町川などの河川、大鳴門橋の向こうには淡路島をはっきりと望むことができる。しかし、眉山に対する認識は旧来から必ずしも一貫したものでなかった。そもそも藩政時代には山頂への登頂が厳しく制限されていたとの指摘もあるが、中腹から麓に広がる大滝山は持明院建治寺の境内として賑わいを見せていた。一方、明治初頭に持明院が廃されたことで荒廃が進んだようである。転機となるのが地元実業家を中心に結成された「眉山公園保勝会」の活動であった。

また、大正末期から昭和初期は、戦後恐慌から震災恐慌、そして金融恐慌から世界恐慌の影響もあって昭和恐慌が引き起こされるなど、厳しい経済情勢が続いていた。政府は土木事業による失業者対策を推進し、徳島県でも徳島―小松島間の産業道路改修事業をはじめ、多くの公共事業が行われた。さらに、各地で地域振興策としての観光事業にも熱が入ったが、徳島でも眉山の観光開発に地元商工会が熱心に取り組んでいくことになった。なお、徳島では阿波踊りと桜の名所を売り出す事業を模索していたが、この阿波踊りの観光資源化については関口寛氏の研究に詳しい^③。

そこで、小稿では大滝山の変遷と大正・昭和初期を中心に観光資源としての桜の名所・眉山の開発について整理し、その過程で浮上した眉山登山鉄道計画の一端を取り上げる。また、あわせて当館が所蔵する関連資料についても紹介する。

一 江戸時代の大滝山

佐野之憲が編纂した藩撰地誌『阿波志』(文化十二年)には、大滝山について次のように記されている^④。

府城の西南五百歩許に在り、前は海口を望み下は里村を俯す、三
面空闊方十餘里瞭然指す可し、巉巖争ひ石段谿に沿ふ、其側に瀑
布あり飛流一條、其水清冽、三層塔、甘露閣其上に聳ゆ、醫王堂
菅公廟左右に對起す、勝景城府第一たり、此間總て西富田に屬す、
瀑水の下流是を佐古の界と為す

このように、文化年間には「勝景城府第一たり」と称される景観がひろがっており、三重塔や甘露閣・医王堂などの建造物が見られたのである。三重塔は宝暦年間に建てられたもので朱塗りの優雅な構造だったが、昭和二〇年の徳島大空襲で焼失した^⑤。

この景観は『阿波名所図会』などの絵画資料でも見ることが出来る。文化八年(一八一二)に浪華で刊行された『阿波名所図会』には「大滝山持明院」の挿図(図一)とともに、「山上の南には観音堂・

祇遠の社・行者堂及三十三所の観音堂あり、北には八祖堂の下に僧庵ありて、其東十宜亭のうへ峙る山頭に大塔あり、「山下の正面には二王門・本堂」があつて、他に天神社・絵馬堂・蛭子社・八幡宮・太子堂など数多くの建築物が林立していた様子が記されている。挿図からも右上の大塔から左下の春日社まで多くの堂舎や休憩所などを含めて広大な境内が描かれており、参詣や遊山の人々にぎわっていた様子が看取される。

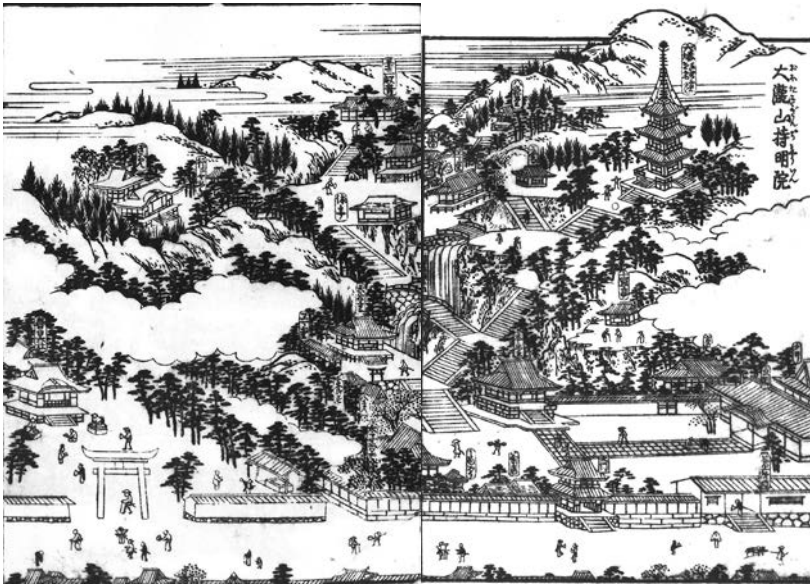


図1 『阿波名所図会』「大瀧山持明院」

観光ガイドブック的性格を有する名所図会に大瀧山が壮大に描かれていることから、浪華の版元にとつても、多くの人々を吸引する観光地との認識があつたのであろう。なお、『阿波名所図会』の「眉山」と書かれた挿図には、新町橋の景観とともに西から「大瀧山」「眉山」「勢見山」の記載があることから、現在私たちが眉山として認識している山塊についても、当時の人々はそれぞれの箇所を個別に呼称していたのであろう。「佐古山」や「名東山」などもそうした地域呼称の名残であろう。

また、木版刷りの「阿州徳嶋大瀧山持明院境内図」がある(図2) (ナゴヤ2024000、以下館蔵資料については整理番号を付記する)。

「彫刻 江戸麹町平川社前 七代目宮田六左衛門 門弟兼吉」と見えることから江戸で印刷されたものであるが、「渡邊圖書源廣輝寫」の文字もあることから、渡辺広輝の画を題材に作成されたものであろう。これには、大門から薬師堂に向かい、さらに進めば愛宕社や祇園社・八幡宮・谷汲観音・稲荷社・真珠庵・三重宝塔などの寺庵等のほか、十宜亭・三宜亭・白糸茶屋やいくつかの茶屋も描かれ、賑やかな情景が読み取れる。こうした景観が江戸時代後期には見えていたのであろう。

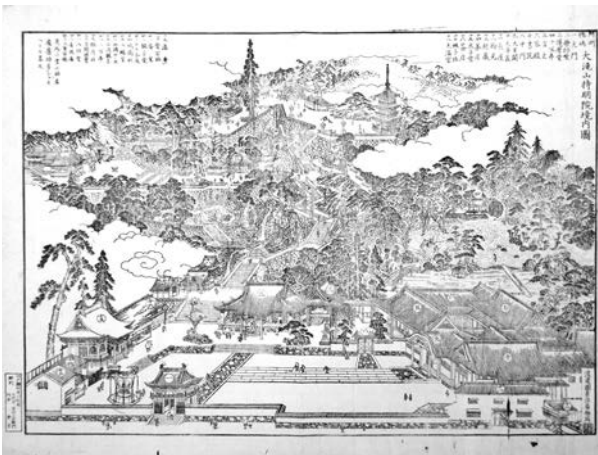


図2 阿州徳嶋大瀧山持明院境内図

文政元年（一八一八）三月二十九日の触れには次のように見えてい

る。^⑧
 毎年二月中旬夕三月下旬迄之間、御山下寺院預山又ハ蔵本佐古下
 八萬山等え遊山人多罷越、心得違毎々火取放候二付、御林目付共
 制道向申付置候処、節句前後二は取分令群集候二付、御林目付並
 下見役之者共令制道候得共、何分數多之遊山人ニて難行届、風荒
 吹候節ハ如何様之大火ニ相成候義も難計、且、御場処柄も有之候
 義候條、尚以已後右様之義無之様可相心得候、萬一野火相起候者
 有之候得ハ、御林目付並下見役之者共ニ召捕セ候上、町御奉行・
 御郡代等え引渡、為相行着候間……

すなわち、春の節句時分には火事が懸念されるほど、眉山山麓の寺
 社への遊山の人数が多かったことがわかる。また、これに先立つ寛文
 九年（一六六九）七月十八日の触れには、滝薬師や勢見観音などでは
 「縁日」が催されていたようである。「縁日」は助任の万福寺や福島の
 正福寺などでも行われていたし、諸寺院で「開帳」もなされていたこ
 とが『藩法集』から確認できる（『藩法集』【五七二】・【二〇〇〇】）。
 徳島城下においては、寺社仏閣への遊山が数多くあり、その賑わい
 が「阿州徳嶋大瀧山持明院境内図」などにも表現されていたのである
 う。

二 大滝山の公園整備

明治三十五年（一九〇二）の夏、翌年に大阪天王寺で開催が計画さ
 れていた第五回内国勸業博覧会や徳島県内で予定されていた四国実業
 大会に向けて、次のような建議書が出された。^⑨

大瀧山風致保存の義に付建議

明年大阪府下に開設せらる、博覧會及本縣に開催する四國實業
 大會に就ては、自然來縣者あるの見込にして、本市に來杖のものは
 主として大瀧山を遊覽する者多しとす。然るに近時該山は大に
 頽廢し、^(五)五重塔其他神社佛閣破損し又は道路險惡且掃除尚不行届
 の為め折角の風致を汚損する而已らず、市の体面上にも關するが
 故速かに修理を施し自ら公園的の風致及趣味を加へ之に伴ふ保存
 費を支出成度、最も管理者あるものは其管理人に指導し、市の事
 業に屬するものは當時者に於て適當の計畫あらんことを切望の至
 りに堪えず本會一致の決議を以て此段及建議候也

明治三十五年七月二十八日

第五回内國勸業博覧會徳島協會々長 告森 良

徳島協會会長の告森良は伊予国宇和島藩の出身で、後に鳥取県知
 事・千葉県知事を務めるが、この当時は徳島県書記官をしていた。県
 の要職にあつたことから会長職にも就任したものであるが、この
 建議書によれば、翌年の内国勸業博覧会や四国実業大会に際して來県
 者の多くが大滝山を訪れると想定されるが、「近時該山は大に頽廢」
 していると記す。文化年間の『阿波名所図会』にも描かれた大滝山
 だったが、明治の半ば過ぎには荒廢が相当進んでいたようである。明
 治初年に大滝山持明院建治寺が廢寺になったことが大きいのだろう。
 しかし、明治三十一年（一八九八）四月には白糸亭で小杉楹邨の親睦
 会を四国人類学会のメンバーらが開催している記事が「徳島日日新
 聞」に掲載されており、行楽地としての機能は全く失われてはいなかつ
 たものと思われる。

その後、明治三十九年には日清戦争戦勝記念として出征兵士らが建
 立していた神武天皇像が現在地に移され、翌年には大滝山公園の整備
 が徳島市によって進められることになった。ただし、その整備は神武
 天皇像の前面の広場など、部分的なものにすぎなかったようである。



図3 徳島眉山公園地全圖 (イワム400632000)

一方、明治四十四年以来、徳島商工会議所の実業家を中心とした民間人によっても大滝山周辺の開発が計画されていた。実業家で酒販売業を営み、眉山の土地所有者の一人でもあった天野亀吉が主唱し、政治家の曾我部道夫らも関わって眉山の公園化が提唱されるようになった。大正二年（一九一三）にはその天野を会長に「眉山公園保勝会」が結成されている。この「眉山公園保勝会」のメンバーについては、その多くが徳島商工会議所のメンバーであったことが板東ゆかり・真田純子によって指摘されている^⑩。この「眉山公園保勝会」の発足にあたって作られたのが「徳島眉山公園地全圖」である（図3）。林鼓浪の筆になるものである。

これによれば、大滝山から勢見山の金毘羅神社まで沿道に桜が満開の情景が描かれているが、この図は保勝会の発足を呼びかけた大正初年に作成されたものであることから、当時の景観が描かれていたわけではなく、完成予想図だと理解するべきであろう。

この裏面には「眉山公園保勝会設立趣意書」が記されている。

本市船場町天野亀吉氏ハ明治四十四年六月左記ノ趣意ニ依リ公共的事業トシテ眉山公園設備ヲ主唱セラレ爾来一箇年ノ星霜ヲ費シ東奔西馳市内有志ノ門ヲ敲キ大ニ輿論ヲ喚起シ今ヤ壱千ニ垂々タル賛成者ヲ得茲ニ同情補成ノ意ヲ以テ本會ヲ組織シ天野氏ノ企畫ノ遂行ヲ期セントス大方諸君奮テ御賛成アラン事ヲ望ム

大正二年 月

眉山公園保勝會

幹事長 曾我部道夫
幹事 (伊呂波順)

井内太平

(以下略)

また予算についても記されており、総額一万円で、内訳として六二五〇円が道路工事費、一六〇〇円が桜（大）の植樹二〇〇〇本、一〇〇〇円が桜（小）の植樹一〇〇〇〇本、六〇〇円が楓の植樹一〇〇〇本、二五〇円が梅の植樹二五〇本、雑費・予備費三〇〇円などとなっている。

その後、昭和三年（一九二八）には新町住民から市に対して眉山公園開発の陳情がなされたほか、昭和六年一月には徳島商工会議所会頭の玉田弥伊太らによって「眉山公園開拓期成会」が結成されている。



図4 箸蔵登山鐵道 (s201500136)

そして、同会では道路整備や登山ケーブルの敷設、桜花の植樹、全国有名寺社の勧請などによる「遊園地化」が計画された。この事業は失業救済事業でも



図5 大瀧山公園の中部 (shinohara0164)



図6 大瀧山東山 (shinohara0144)



図9 大瀧山公園内 神武天皇之銅像前 (shinohara0186)



図10 春日公園 (shinohara0157)

あつたと昭和六年一月十日付の「徳島毎日新聞」の記事に見えてくる。そして、同十五日に期成同盟会の発会式を開催した。

なお、この当時は、大正九年に奈良県の生駒山東麓の鳥居前から宝山寺間に敷設されたのを皮切りに、各地で登山鉄道（ケーブルカー）の開設が盛んに進められていた。四国でも昭和四年に屋島登山鉄道（香川県）、昭和五年に箸蔵登山鉄道（徳島県）（図4）、昭和六年に八栗登山鉄道（香川県）が相次いで開業している。大正末から昭和初期にかけての時期は、筑波山（茨城県）や高尾山（東京都）、比叡山鉄道（滋賀県）、大山観光鉄道（鳥取県）、高野山ケーブル（和歌山県）など各地で開業が相次いだ。

眉山における登山鉄道（ケーブル）については後述するが、昭和七年二月には徳島市勸業係や徳島商工会議所、市宿屋連盟らが中心となって関西方面に阿波踊りや大滝山界隈の絵葉書や案内を送付したり、旅行団体や主要駅に宣伝隊を派遣したりしている。徳島県立文書館には、この当時の大滝山の様子の写真が写された絵葉書が所蔵されている。



図7 三宜亭前の桜 (shinohara0195)



図8 神武天皇之銅像 (shinohara0163)

ので、その一部を紹介する（図5～図10）。



図11 徳島及小松島ヲ中心トスル鳥瞰図 (2s 徳島及小松島)



図12 図11の大瀧山・眉山部分の拡大

その後、同年五月六日には「徳島観光協会」の創立協議会が開催され、六月二十五日の創立大会へとつながっていった。観光協会は、翌七月に観光協会自らの取組として盆踊りの宣伝、県外からの盆踊り見学者へのサービス、盆踊り審査に関わることで、さらに関連機関に働きかけて県外団体客への鉄道運賃割引に加えて、眉山公園開拓の促進や徳島公園の整備なども要望している。¹²⁾

なお、昭和六年刊行の吉田初三郎「徳島及小松島ヲ中心トスル鳥瞰図」を見れば(図11)、大瀧山

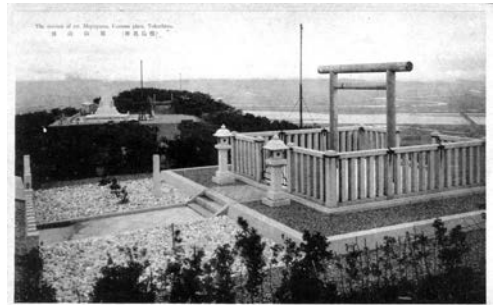


図13 眉山山頂 (shinohara0191)

に加えて眉山山頂部に伸びる登山道や勢見山からの遊歩道も描かれており、その山頂部にも皇陵遙拝所が見える(図12・13)。

このように、この頃にはすでに眉山全体の観光資源化が進められていたものと思われるが、実業家を中心とした「眉山公園保勝会」の目的が大瀧山だけに限定したものではなく、金毘羅や観音寺がある勢見山方面まで組み込んだ遊歩道を整備し、その沿道に桜の植樹をすることで眉山を一体的に開発していかうとするものであったこと

とがわかる。¹³⁾ こうした取組で誘客効果を上げようと目論んでいたの

であろう。その結果、大瀧山は、その麓の薬師堂の境内に焼餅屋が二軒でき、その前を登ると清涼橋があり不動尊が祀られている。清涼橋の下を流れるのが不動の滝で、この滝は白糸の滝とも呼ばれたことから、そのそばにあった料亭は白糸亭の名を冠した。さらにその上手には三宜亭や梅屋、春日野玉水などの料亭が並んでいた。

昭和八年には「徳島縣ノ名勝舊跡ヲ紹介シテ遊覽ノ便ニ供シ各種物産郷土藝術等ノ宣傳擴布ニ資スル」(規約第二条)という目的で「阿波郷土協会」が設立され、『阿波の徳島』が発刊された。その創刊号は「眉山城山號」と名付けられ、眉山や城山周辺の名勝を紹介している(メイト07616000)。また、昭和九年春には大阪時事新報社の投票でも「四国八景」の一つに入選している。昭和初期に観光資源として着実に環境が整えられていったことが読み取れる。

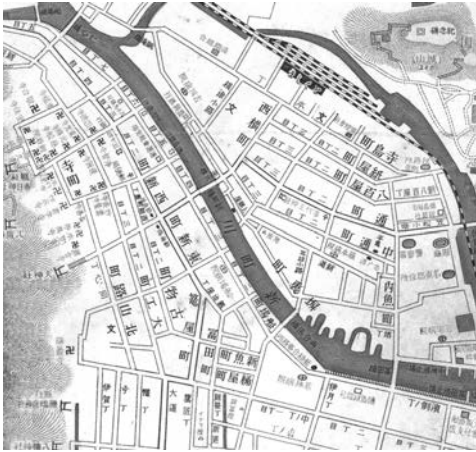


図14 徳島市街図（明治44年）（部分）
（イワム01917000）

三 眉山登山鉄道の計画

観光資源として眉山の公園化が進められていたが、登山鉄道敷設の計画もあった。前述のとおり「眉山公園開拓期成会」が登山ケーブルを計画していたが、昭和六年（一九三二）一月二十一日の「徳島毎日新聞」に、「資本金三十五萬圓で眉山へケーブル」の見出しで眉山登山鉄道の計画の記事が掲載されている。これによれば、発起人は西鶴吉と和泉茂吉で、「北山路同心町」から眉山頂上に至るものであり、「賃銀は往復三十銭」とある。この「北山路同心町」は天神社前から新町小学校に至る地名であり（図14）、現在のロープウェイ乗り場のある場所が計画されていたことがわかる。

しかし、一月二十四日付の「徳島毎日新聞」には、徳島県林業課の発言が掲載されており、「眉山ケーブルは風致を害せぬやう」との見出しで、保安林であることから風致を害することがないこと、自動車道も作る計画があるが、森林地帯が消滅することから保安林の一部を解除しなければならぬこと、登山ケーブルが完成しても採算は合わないだろうというコメントを寄せている。

また、「眉山登山鉄道」とは別に「眉山鋼索鐵道」敷設の願者のいたことが、「徳島毎日新聞」昭和六年二月九日の記事

に見える。これには、寺島町熊澤順太郎・山瀬町平野鍋吉・小松島町庄野祐吉らの名前が発起人に記されている。

その他にも、いくつかの眉山登山鉄道（ケーブル）計画があった。小川袖香（國太郎）の『眉山公園案内』によれば、「船場倉本吉藏氏はケーブルに経験あり、舊來の新町而目一新として進んで徳島市の發展のために、眉山にケーブル架設の意あり、株式組織よりも獨立の方針を持つて居られる。富田山路藤守武次郎氏は眉山に自動車新道の目的を持つて居る、天神山、勢見、瑞巖寺調査の結果最適のヶ所は瑞巖寺裏山であつて、自由に迂廻線がつくられる由である。」と記されており、西鶴吉の登山鉄道計画よりも前からケーブルカーや自動車道の計画のあったことがわかるが、この倉本吉藏と西鶴吉の関係については不詳である。「官報」に「西鶴吉外六名」と記されたメンバーの一人だったのかもしれない。しかし、倉本吉藏が計画を単独で遂行しようとしていたように、開発計画が大きくなうねりにはならなかったようで、西鶴吉の出願に至つたのであろう。

ところで、当館には昭和八年二月の日付をもつ「眉山登山鉄道利用人員再調査答申書」が所蔵されている（イワム0067000）。徳島市富田浦町字西富田にあつた「眉山登山鐵道株式会社創立事務所」の代表西鶴吉が作成したもので、鉄道大臣三土忠造に宛てられたものである。「再調査」とあることから、これに先立つて何らかの動きがあつたであろうことが、昭和六年の新聞記事からも推察できる。

眉山登山鐵道利用人員再調査ノ件

一、昭和八年一月十四日附徳島縣土第一四九號ヲ以テ眉山登山鐵道利用人員再調査ノ件ニ付御下命ニ相成概算書中運輸數量ノ見積リ過大ト認ムトノ義ナレドモ現在ノ眉山公園ヘノ登山者昭和七年春季ニ於テ壹日最底參千人以上最盛壹万人ヲ越ユル登山者有夏季ニ於テハ昼間五百人乃至七百人夜間納涼登山者三百人乃至五百人ノ登山者有秋季ニ於テハ壹日最底壹千人以上最盛三千人以上ノ登山

者有冬季ニ於テハ壹日平均参百人ノ登山者有右記ノ如キ登山者ナルヲ以テ春季壹日平均六千五百人、夏季壹日平均八百人秋季壹日平均貳千人冬季壹日平均参百人以上ノ如キ登山者有リ、依テ今後徳島市ニ於テ眉山全部ニ及ボシ一大公園ノ計画ヲ進メツ、有リ、猶且ツ当鐵道ニ於テモ種々開発ナシ一大遊園地トナス計画ナルヲ以テ登山者ハ以前ニ増シ多数ノ登山者有ルハ疑ナク亦近時縣外人ノ來遊スル者非常ニ多ク昭和七年春季ニハ数万ノ團體客來遊ナセシ有様ナリ、現今ノ如キ眺望充分ナラザル全公園ニ於テスラ前述ノ状態ナルヲ以テ鐵道完成ノ暁ハ利用登山者多数有見込ナリ故ニ當計画豫算ハ安全ヲ慮リ前提出願ノ如ク春季貳千人夏季七百人秋季壹千人日曜祭日壹千人平日壹百人ト見積リシ次第ナルヲ以テ概算書ハ過大ノ見積ニアラザルモノト思考スル次第ナリ、以上ノ如キ次第ナルヲ以テ何卒御認可ノ速カナラン事ヲ奉懇願候

昭和八年二月 日

徳島市西富田一一三四番地ノ二

眉山登山鐵道出願代表者

西 鶴吉

印

鐵道大臣 三土忠造殿

これを見れば、前回提出時の登山者見込み数が過大であるとして鐵道省の建設認可が下りなかつたことがわかる。それに対し、西鶴吉が登山者見込み数を明記して再度の提出に及んだものである。その後、「官報」二一四七号（昭和九年三月一日発行）には、「鐵道免許状下付 去月二十七日眉山鐵道株式會社發起人西鶴吉外六名ニ對シ鐵道敷設免許状ヲ下付セリ 其起業目論見ノ概要左ノ如シ（鐵道省）」として、動力は電気、軌間は一・〇六七メートル、起終点として徳島県徳島市北山路町地内、料程が〇・四四料、建設費が三万五千元と掲載されている。この「官報」の記事から、鐵道省は西鶴吉らの申請を認可したことがわかる。

ところが、翌十年七月十七日の「官報」二五六一号には、「鐵道免

許失効」として、「昨九年二月二十七日眉山登山鐵道株式會社發起人西鶴吉外六名ニ對シ免許シタル徳島縣徳島市北山路町地内鐵道ハ指定ノ期限マテニ工事施行ノ認可申請ヲ為サ、ルタメ免許ハ其効力ヲ失ヘリ（鐵道省）」と記されている。その要因は不詳であるが、資金調達とその背景にあつたのであろうか、または適地ではなかつたのであろうか、今後の課題としたい。

その後、戦局の悪化とともに、各地の登山鐵道は不急不要路線として休止に追い込まれ、線路は撤去されていくことになつたのである。

結局のところ、眉山登山鐵道は実現することはなく、自動車道も戦前には整備されることはなかつた。

おわりに

江戸時代後期には『阿波志』や『阿波名所図會』に描かれた大滝山持明院建治寺であつたが、明治初頭に廢寺となつて荒廢が進んだ。しかし、明治末期から公園化の動きが見え始め、「眉山公園保勝會」が桜の植樹や遊歩道の整備に努め、徳島市も神武天皇像前を整備するなど、大正末期から昭和初期には料亭や焼餅屋などもあつて観光名所となつた。しかし、昭和二十年の徳島大空襲で大滝山の象徴だつた三重塔が焼失するなどして、今では賑やかだつた当時の大滝山の風情を偲ぶことが難しくなつていく。

眉山登山鐵道の敷設計画が持ち上がった頃、勝浦郡多家良村の中津峯でも宝珠院如意輪寺への参詣客を目的とした「中津峯登山鐵道」が森午三郎らによつて出願されたようであるが、これも実現しなかつた。また、自動車道の整備計画についても、その当時に実現することはなく、昭和四十五年十二月まで待たねばならなかつた。

そして、ようやく昭和三十二年十二月になつて市営のロープウェイが営業を開始することとなつたが（図15）、これは翌三十三年に開催された徳島産業科学博覧会の目玉として建設されたものである。そし

て、山頂には展望台やパゴダ、モラエス館、レジャー施設を兼ねた宿泊施設「スカイランド眉山」、郵政省簡易保養センターなどが順次建設され、昭和四十年代半ばには有料道路眉山パークウェイも開通し、近代的な観光地としての装いを整えていった。

しかし、現在では山頂にあった施設も老朽化して撤収されたものも

少なくない。観光客の

志向性の変化もあって

眉山の魅力が乏しく

なっている実態がある

が、「眉山公園保勝会」

を結成した先人たちが

は、地域の魅力化に奔走したのであり、現在の

の私たちにも地域資源

の掘り起しが喫緊の課題である。そのため

は、地域の歩みを学び

直すことが肝要であり、

当館の収蔵資料にも

関心が集まるよう尽力

していきたい。



図15 眉山ロープウェイ開業日の様子(0003-06-15)

之大火二相成候義も難計…」と見えることから、遊山として眉山を楽しむ人々があり、それに伴って山火事の危険性も高まっていたことが読み取れる。

(2) 徳島県議会議務局編『徳島県議会議史 第一巻』徳島県議会議務局 一九七二年。

(3) 関口 寛「昭和初期・徳島における観光産業振興と阿波踊り」『凌霄』一四号 四国大学附属図書館 二〇〇七年。

(4) 笠井藍水訳『阿波誌』歴史図書社 一九七六年(初版一九三三年)。

(5) 笠井藍水『徳島縣新名勝案内』阿波名勝会 一九三四年。

(6) 『阿波名所図会』から眉山の景観について論及したものに、佐藤征弥他「阿波名所図会」における眉山の自然と景観」『徳島大学地域科学研究』一巻(二〇一二年)などがある。

(7) 藩法研究会編『藩法集3 徳島藩』創文社 一九六二年 三〇四号。

(8) 藩法研究会編『藩法集3 徳島藩』創文社 一九六二年 五七一号。

(9) 徳島市議会議史編さん委員会編『徳島市議会議史 第一巻 明治二十二年～昭和二十一年』徳島市議会 一九八九年。

(10) 板東ゆかり・真田純子「眉山の変遷に関する研究」『景観・デザイン研究講演集』六号 二〇一〇年。

(11) 昭和初期までに開業した登山鉄道(ケーブルカー)は、戦局の悪化に伴い不要不急の施設であると見なされ、昭和十九年までに概ね休止・廃止に追い込まれ、敷設していた施設も撤収されている。西田博嘉「四国のケーブルカー・ロープウェイ変遷誌」(私家版 二〇一三年)参照。

(12) 前掲注(3)に同じ。

(13) 前掲注(10)に同じ。

(14) 前掲注(5)に同じ。

(15) 小川袖香「眉山公園案内 附徳島公園」小川國太郎 一九三〇年(ハナダ0559900)。

(16) 『徳島市史 第三巻 産業経済編・交通通信編』徳島市教育委員会 一九八三年。

(17) 前掲注(16)『徳島市史 第三巻』、ふるさと徳島編集委員会『ふるさと徳島』徳島市文化振興課 一九八八年。

(注)

(1) 多田茂信他『佐古諏訪山考』私家版 一九九五年。ただし、『藩法集3

徳島藩』にある文政元(一八一八)年三月二十九日の触れ【三〇四】には、

「毎年二月中旬より三月下旬迄之間、御山下寺院預山又は蔵本佐古下八

萬山等え遊山人多罷越、心得違毎々火取放候ニ付、御林目付並下見役之

者共令制道候得共、何分數多之遊山人ニて難行届、風荒吹候節ハ如何様